



校長室の窓から



第6号 (平成29年10月 2日号)

鳴瀬桜華小コミュニティ・スクール推進プログラム

『命』 『絆』 『心』

枝豆栽培・ずんだ餅づくり体験

鳴瀬桜華小コミュニティ・スクール(地域と共にある学校づくり)を推進する取組の一つとして、去る9月29日(金)に、「まぎ〜らいん」の皆様方と地域のボランティアの方々、保護者の方々の御支援・御協力をいただき、学校農園で育ててきた枝豆を使っての「ずんだ餅づくり」体験学習を行いました。鳴瀬桜華小コミュニティ・スクールは、『被災地「鳴瀬」から「世界」へ！発信！〜「命」「絆」「心」〜』をスローガンに、「命を育む」活動をフィールドとして「命の尊さ」「食の大切さ」「人と人の絆・地域の絆」「日本の心」を学ぶ貴重な教育活動です。当日は、「まぎ〜らいん」の三浦美和子様、大江公子様、小畑倫子様、志野栄子様、鈴木ミヅ子様を中心に地域・支援ボランティアとして、滝幸子様、三浦光子様、太田きえ子様、熱海すみ子様、様、門間利文様、八木きみえ様、菅野かよ子様、遠藤喜代子様、石垣りり子様、様、平塚しげ子様の多大なる御支援・御協力を賜り、活気と笑顔溢れるすばらしい展開されました。大豆を「育てる」、ずんだを「つくる」、ずんだ餅を「食べる」という体験をとおして、子供たちは、何を学ぶことができるのでしょうか。どのような教育的価値が有るのでしょうか。考えてみました。

- ① 農業に対する意識、生命や食の大切さ、働くことの意味について実感します。
- ② 栽培し、収穫し、食をつくる(働くこと=勤労)の「喜び」と「価値」を実感します。
- ③ 勤労、協働における力を合わせることの「喜び」や「価値」も実感します。
- ④ 大人(先人)から学ぶことの「喜び」や「価値」も実感します。
- ⑤ 大人(先人)の識見や後姿に対する「尊敬の念」や「敬う心」を育みます
- ⑥ 指導や支援してくださる方々との関わりをとおして「感謝の心」が育まれます。
- ⑦ 伝統的な食文化への理解を深めます。(食育基本法第24条「地域の特色ある食文化の継承」)
- ⑧ みやぎの志教育「人と『かかわる』」「よりよい生き方を『もとめる』」「社会での役割を『はたす』」の実効性を高める教育の場ともなります。
- ⑨ 地域の人と人をつなぐ絆づくりの機会でもあります。学校を軸とした地域の絆づくり(ソーシャル・キャピタルの醸成)の機会です。教育振興基本計画が示す「絆づくりと活力あるコミュニティの形成〜社会が人を育み、人が社会をつくる好循環〜」の具現化に向けた取組としての価値もあります。

また、このような体験活動の重要性について、文部科学省は、近年の子供をめぐる課題、特に、「人間関係をうまく作れない」、「集団生活に適應できない」子供の増加やいじめの陰湿化に代表される「規範意識の低下」、「物事に創意をもって取り組む意欲の欠如」、「いわゆる『キレる』子供の問題を克服する有効な手立てであると指摘しています。ちなみに、文部科学省は、これらの問題の背景を、①自然や地域社会と深く関わる機会の減少、②集団活動の不足(「集団」から「個=孤」へ)、③物事を探索し、吟味する機会の減少、④地域や家庭の教育力の低下ととらえています。そして、自然体験が子供の「道徳観・正義感」「学ぶ意欲」を育むという調査結果を公表しています。このような視点からも、紹介した体験活動の教育効果の大きさが指摘できます。今年度もこれから、「サツマイモ」や「もち米」、「そば」等の収穫等様々な体験活動がコミュニティ・スクール推進事業として計画されています。21世紀に生きる子供たちの将来の幸せ(=豊かな社会的自己実現)に向けて、地域と共に実践する体験活動の教育的効果を最大限に生かす教育の充実に努めていきたいと考えています。

コミュニティ(地域)と共に子供を育む！
地域の皆様、ありがとうございました！！



日本人が持つ最も美しい価値観の一つ「敬う心」

「敬老の日」は、多年にわたり社会につけてきた老人を敬愛し、長寿を祝う「国民の祝日」であり、米国から伝わった「母の日」や「父の日」とは違い、日本独自の文化を象徴する記念日として意義深い祝日です。日本文化の真意は、尊きものを敬う心にあるとも言われています。

著名な思想家「安岡正篤」は、右記のような言葉を残しています。人の人たる所以は、道徳を持っていることです。そして、それは「敬するという心」と、「恥ずるという心」になって現れます。いくら発達した動物でも、敬するとか、恥ずるという心はありません。これは人間に至って初めて神が与えたものなのです。「敬するという心」は、人間が常に進歩向上していく、その高きもの、尊きもの、大いなるものの感覚、知覚です。そういうものを私たちが悟るとき、私たちの心に敬う、敬するという心が生まれてくるのです。また、「敬」と「恥」は、相対関係にあり、「敬する心」があると、必ず今度は内に省みて、そこに「恥ずる心」が生まれてきます。恥を知る。恥ずるから戒める。慎む。恐れる。悔いる。そういう一連の心理が発達してくるのです。

松下電器産業の創業者「松下幸之助」は「天地自然、この世の中、敬う心があれば敬うに値するものは無数にある」という言葉を残しています。敬うべきものを敬うことによって自他ともの心を豊かにし、高めることができるのは人間だけです。その人間の特性を素直に生かしていきたい、敬う心を高めて、おたがいの豊かさはかっていきたいものです。親を敬い、師を敬い、友達を敬い、自然を敬う。日本人が持つ最も美しい価値観の一つ「敬う心」を大切にしていきたいものです。

敬という心は、言い換えれば、少しでも高く
尊い境地に進もう、偉大なるものに近づこうと
いう心である。
したがってそれは同時に自ら反省し、自らの
至らざる点を恥ずる心になる。
省（かえり）みて自ら懼（おそ）れ、自ら慎
み、自ら戒めてゆく。
偉大なるもの、尊きもの、高きものを仰ぎ、
これに感じ、あこがれ、それに近づこうとす
ると同時に、
自ら省みて恥ずる、これが敬の心である。
東洋では等しくこれを道と言う。
(安岡正篤一日一言より)

☆子育てのヒント☆

『子供の実力を引き出す』

◇「校長先生、小さい子には『おはようございます』というくせに、ぼくらには『おはよ』だけじゃ…」

「まだましよ。知らん顔しとる…『校長先生！』といったのに知らん顔で…」

◇「あのね、お母さんってだいたい嫌いになる時がある。電話でバカでいいいにぺこぺこしているくせに、受話器をおいたとたん…」

◇「ぼくらの先生、参観日はふだんと全然ちがうの…」

これらは子供達が、私を含めた大人に対する不信感を言ったものです。

自分らしさ(個性・主体性)に乏しく、相手したいで考え方や言葉遣いがころころ変わる心貧しい大人たちの中で、子供たちは傷つき、イライラして不信感を募らせているようです。

繊細な子供たちの感情を傷つけないために大人がすべきことは何か。いうまでもなく、子供に不信感を抱かせてしまうような言動、行動をとらないことです。そして子供を信頼することです。信頼する人と人との中に行くと、子供は変化していきます。

親や教師が子供のすべてを受けとめる、この子はこの子のままでいいんだと認める。認められたことによって、子供は、わたしはわたしのままでいいんだ、というゆとりと安らぎを得ることができます。それによって、今まで抑圧されていた本当の自分が生き生きと顔を見せることになります。かくれていたその子なりの力が出てくるのです。

息き立てられていた子供が、自分なりに考えることや行動することが許されると、はじめは少し脱線することがあります。「自由」がわがままとなってあらわれることもあります。しかし、それは一時のことにしかすぎません。やがてわがままの醜さを知り、自分で考え行動しているうちに「わたし」というものが確立してきます。そうなる自分でも気づかずにいた力をぐんぐん発揮するようになり、より正しく、より美しく、より良くなるうとして、何ごとにもかえがたい「学ぶ喜び」を知るのです。生きることってこんなに楽しいことなんだとわかってきます。その変化は、子供の「目」にあらわれます。顔つきや声ややわらかくおっとりしてきます。陰日なたがなくなり、ごこそしません。イライラしません。当然実力が出ます。

子供たちがこれから出ていく世の中は決して甘いものではありません。進学試験、就職試験等さまざまな試練がついてまわります。それらを自らの力で乗り越え世界に羽ばたいていく。そんなたくましい子供に育てていきたいものです。

